

専門的な支援機関との連携

今回は、就労準備の段階から、ハローワークや支援機関などが連携して支援にあたり、現在も職場定着支援を続けている事例を紹介します。支援にかかわった方々にお話をうかがいました。

取材協力/社会福祉法人千寿会(神奈川県高座郡寒川町)社員(契約社員など含む)220人、障害者社員8人(身体1人、精神5人、知的2人)、就労移行支援事業所Melk 本厚木office

車いすで電話対応などの事務を担当

「社会福祉法人千寿会」が運営する「特別養護老人ホームきくの郷」の事務室で、電話対応や郵便物の取りまとめなどを担当しているのが、岩田智幸さん(46歳)です。現在、車いすを利用して仕事をする岩田さんは、20代のころに多発性硬化症を発症。転職のために、地元のハローワークで求職活動をはじめました。

ハローワークの難病サポーターが、岩田さんとの相談を開始したのが就労支援のはじまりです。当初、神奈川県障害者職業センター(以下「職業センター」)のサポートを得ながら、すぐに就職したいと考えていましたが、岩田さんの症状が進んだため、就職に向けては段階的に進めていくことにしました。そこで、ハローワークから岩田さんに、自宅近くの就労移行支援事業所の活用について提案があり、本人が自治体の福祉課と相談し、「就労移行支援事業所Melk本厚木office」(以下「Melk」)に通所することになりました。

状況に合わせて支援の方向性を探る

Melkに通いはじめた岩田さんは、ほかの利用者同様、プログラムを利用して就労準備を進めました。しかし、病

ない」と考え、「きくの郷」にも様子を見せました。すると心配していた通り、事業主が困っていることがわかりました。そこで、Melkは本人と事業主に、職業センターのジョブコーチの活用を提案し、ジョブコーチによる支援を開始しました。

ジョブコーチは岩田さんの仕事の様子を確認したうえで、職場環境の見直しについて事業主に提案しました。

具体的には、首を動かして振り向けない岩田さんのために、全体が見渡せる

位置に席を移動したり、電話の横に対応時のセリフカードを置くなど、どれも些細な工夫ですが、ジョブコーチが支援に入ったことで、職場のみなさんは岩田さんの状況や支援の必要性について、初めて気づくことができたといいます。

仕事、生活、医療、支援の分担が安心感につながる

先日、岩田さんがトイレ使用時に転倒するというアクシデントがありました。それまで岩田さんは、車いすから杖を使

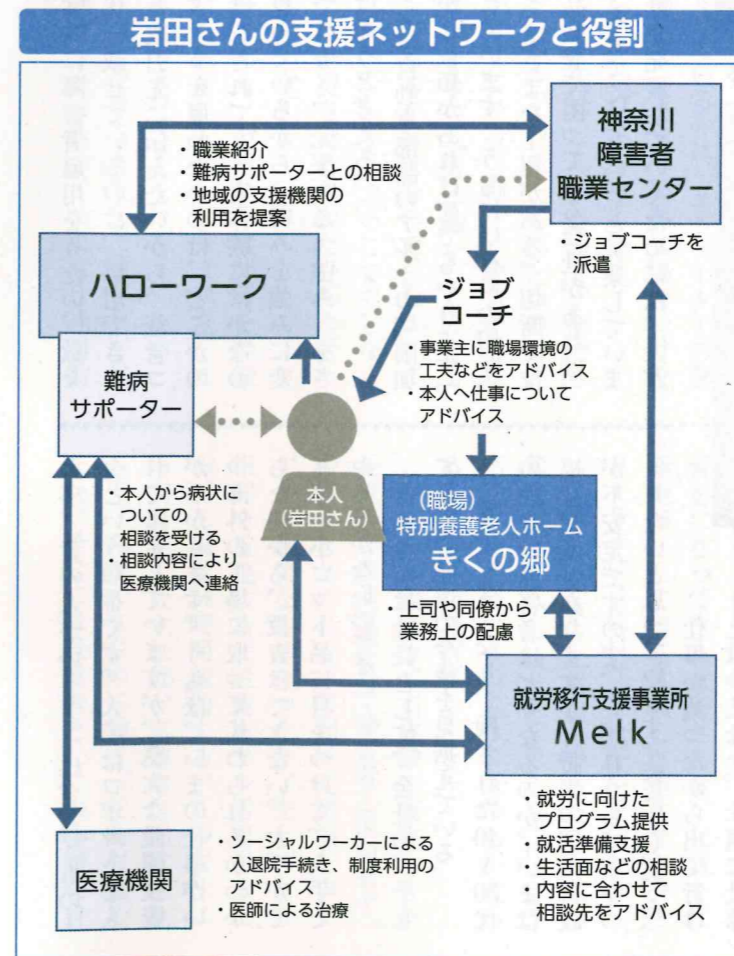
気の進行による筋力低下のほか、ときおり物事を忘れてしまう様子も見られました。

「働きたい」という意欲が高かった岩田さんは、病気の進行という不安を抱えながら、モチベーションを保つための支援が必要でした。そのため、本人が自身の症状に対する理解を深めたいという思いと提案し支援の方向性が固まってきたと、Melkの寺戸さんと話しました。

その後、地域で障害者雇用に関する取り組み「きくの郷」で、岩田さんは障害者トライアル雇用の機会を得

した。当初、リネン室で洗濯物をたたむ軽作業を行う予定でしたが、2階のリネン室は車いすが使用できないため、1階の事務室で事務補助の作業に就くことになりました。

障害者トライアル雇用の3カ月間は、短時間ですが毎日出勤し、仕事帰りにMelkに電話で報告することが日課となりました。岩田さんに様子をたずねると「注意されることもありませんが、うまくやっています」という答えが返ってきました。しかし、Melkの職員は「職場で注意されているようであれば、事業主さんは困っているのかもしれない



何かあったときに気軽に話せる人を持つこと

社会全体で人間関係の希薄化が指摘される時代、この「ちょっとした関係」をつくり、保つことは容易ではありません。障害者、という言葉は、枠組みを示す名詞のため、人を一律に映してしまいう言葉だと思えます。障害者も、年齢相応の変化があることに加え、介護者になるなど、健常者と同様、予想もしなかつた役割をになうことがあることを忘れてはなりません。また、固定的な障害だけでなく、精神障害や、本編のような難病を発症した場合、病状の揺れや進行もあつたりします。

このような長期的なステージのなかで、外部の支援機関の役割の一つは「ちょっとした関係」をになうことであると思います。例えば、ちょっとした買い物に出たときに知り合いと会って、「元気？最近どうですか？」と言葉を交わし、笑顔でさらっと別れるときもあれば、「えー、たいへん！それじゃあ、明日ちょっと会いませんか？」となることもある。外部の支援機関と会社や本人は、そんな「ちょっとした関係」を目ざせるといいと思います。

キーワードは、「抱え込まない・抱え込ませない」ということです。



認定NPO法人Switch 常務理事 小野彩香

ポイント

- ★ 日常業務のことは職場内でフォロー
- ★ 抱え込まずに、専門の支援機関に相談
- ★ 生活面、医療など相談先を分担することで事業主も本人も安心



短期記憶が苦手なため、どこまで作業を行ったかわかるよう表示している



訪問者にハンディキャップがあることを知らせ、理解と協力を求める



【特別養護老人ホームきくの郷】



岩田さんをはさんと、Melkの寺戸さん(左)と「きくの郷」で事務作業を指導する職員の飯島さん(右)

って立ち上がり、トイレを使用していたが、転倒した際に起き上がることができないため、それ以降は施設利用者用の車いすトイレを使用することで、転倒の危険性を減らすことができました。しかし、職場のみなさんは、同僚によるフォロの限界を感じたといいます。

「障害の有無にかかわらず、だれにでもミスはありますから、職場内で仕事のフォローはしますし、声かけや注意はできます。しかし、体調や病状のことはよくわからないので、不安を感じます。先日のアクシデントの際は、すぐにMelkさんと相談できたので安心しました。今回のようなアクシデントがあったとき、相談できる支援機関があるのはとても心強いです」と職員飯島さん。

現在、岩田さんと事業主からの相談への対応はMelkが受けています。相談内容に合わせて、職員が相談先についてアドバイスをしています。

「仕事に関することは、職業センターを通じてジョブコーチに相談しています。病気のことは、難病サポーターから医療機関につなぎ、ソーシャルワーカーが制度利用などについてアドバイスします。それぞれの分野の専門家が効率よく支援できるので、どこか1カ所に負担が偏ることなく、本人も職場の方も安心できる、そんな支援ができていと思っています」と寺戸さんは話してくれました。